

児童の前向きな思いを育む支援のあり方

—「ナラティブ」の手法を取り入れた小学校特別支援学級での実践を通して—

教職実践応用領域 授業づくりモデル

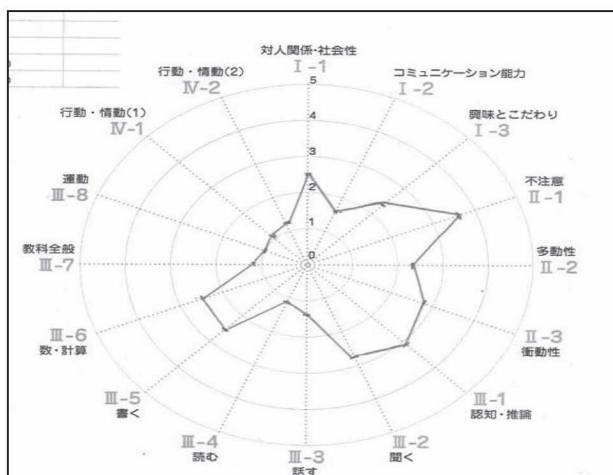
市野 雅貴

1 テーマ設定の理由

(1) 児童の実態

私が担任する特別支援学級に通う6年男児（以下Aとする）は、学級の友達（特に年下の児童）に対して優しく教えたり、遊んだりすることができる。また、友達と楽しく話をしたり、ブロックを使った遊びなどでごっこ遊びをしたりすることができる。その反面、今、何をすべきかという認識が弱く、教師の指示を聞いていても行動に移せなかったり、ほかの事を気にして、指示自体を聞いていなかったりする。このため、言語理解の高さは全体の場では生かされないことが多い。また、学級に在籍する低学年の子に対し、過剰に接触してしまったり、相手の気持ちを気にせず、自分の遊びたいという欲求を満たすためにかかわろうとしたりすることが多々ある。また、教師から注意をされても何がどう悪いのか理解できず、同じことを繰り返してしまうことが多い。

Aは、WISC-IVによる検査では言語理解指標が101とほぼ平均ではあるが、ワーキングメモリー指標が60と低くなっている。また、知覚推理指標、処理速度指標がともに78で、全検査IQが78となっている。さらに、Aの特徴を捉えるために、黒澤（2018）の「評価シート」¹⁾を用いて、得意なことや苦手なことを視覚化することにした。このシートは、グラフが外側に広がるほど、支援が必要な項目であることを示している。Aは、[図1]のような結果となり、不注意とともに認知や聞くことに苦しさがあるものの、話すこと読むことが得意であることが分かった。



[図1] Aの評価シート¹⁾

Aは、ワーキングメモリーが特に低いために、指示をすぐに忘れてしまったり、重要なことを選んで覚えたりすることが苦手なため、不注意傾向と相まっ

て、学校生活では、同じ失敗を繰り返してしまい、自信がもてない様子がよく見られる。そのため、Aと話をしていくと、Aは夢がなく常に失敗を想像したり、自分にはできないという思いを感じてしまったりしていることが分かった。このような実態から、Aが自分に自信や、夢をもち目標に向かって学校生活を過ごすことができるようにという願いをもった。

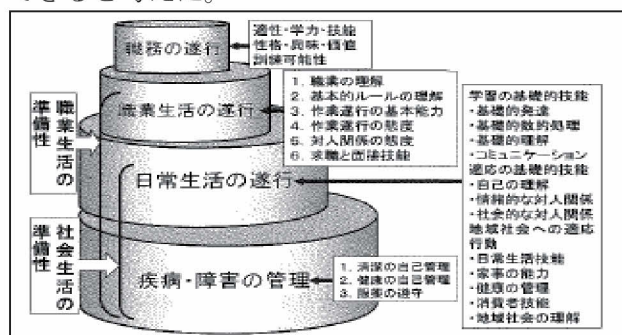
(2) 目指す方向性

Aを観察していると、過去の失敗経験が強く、似たような場面や学習において、苦手だと感じてしまったり、最初から成功しないとあきらめてしまったりする傾向が強くある。そこで、Aにとっての前向きな思いは、自分について正しく認識することで、自分の良さに気付き、将来への展望をもつことだと考えた。

このことは、小学校学習指導要領（2017、3告示）総則の第1章第4の1の(3)の、キャリア教育についても述べられている。その中でも、学ぶことと自己の将来とのつながりを意識すること、将来の生活や社会と関連付けながら見通しをもったり、振り返ったりすることをAにはできるようになってほしいと考えた。

このような「個」に応じた教育をすることは、特別支援教育におけるキャリア教育としても重要な視点であり、全国特別支援学校知的障害教育校長会作成による手引き²⁾には、キャリア教育を進める段階として[図2]のような「個」に合わせた階層構造を掲載している。

Aの実態を考えると、コミュニケーションや家事の能力などは高く、問題なく行うことができる。そのため、「日常生活の遂行」から「職業生活の遂行段階」へと移行していく時期であると捉えた。そこで、職業の理解を正しく行い、就職するまでの道を考えたり、対人関係の態度を改善し、他者と意見を交わしたりすることで、さらなるステップアップをすることができ、Aの良さを伸ばし、将来への展望をもつことができると考えた。



[図2] 個人特性の階層構造と支援のあり方²⁾

一方、Aの個別の指導計画では、本人と保護者の願い、担任の考えは以下の〔資料1〕の通りである。この内容を受けて、長期の目標として、「見通しをもち、何をすべきか意識して生活する。」「係や当番の仕事を進んで行く。」という目標を立てた。見通しをもつこと、自分の仕事をするという事は、将来の就労にもつながっていくと考えた。

本人・保護者の願い	<ul style="list-style-type: none"> 勉強を頑張りたい(本人) 時間を気にして、自分で行動できるようになってほしい。(保護者) 自分で身支度できるようになってほしい。(保護者)
担任の考え	<ul style="list-style-type: none"> 他人から見たら自分の言動はどうか考えられるようにする。 一日の見通し、活動の見通しをもって行動できるようにする。 自分の気持ちや感情を言葉や文字で語る事が出来るようにする。

〔資料1〕個別の指導計画における願い

そして、Aの他者との関わりやコミュニケーションといった、良い部分に注目し伸ばすことで、将来に向けた前向きな姿勢を育てていきたいと考えた。

以上のような考えから、テーマを「前向きな思いを育む支援のあり方」とすることとした。

2 研究の構想

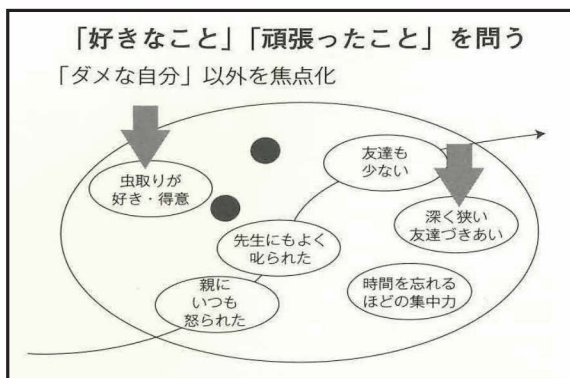
(1) 先行研究の考察

「前向きな思いを育む支援のあり方」を探るための手立てを導くために、先行研究を以下の通り考察していく。

① ナラティブ／社会構成主義キャリア・カウンセリング

渡部(2016)は、『自分はダメだ』という大きな物語を変えるため、本人の良さを焦点化することで、これまで気付かなかった自分の良さや可能性を知ることができるだけでなく、自分の中から問題を外在化することで、問題への対応の方法を客観的に判断することができる。³⁾としている。

渡部は、自分の物語の中に語られないものがあるとし、その部分を焦点化することで、新しい自分を発見できるとして、〔図3〕のような例を示している。



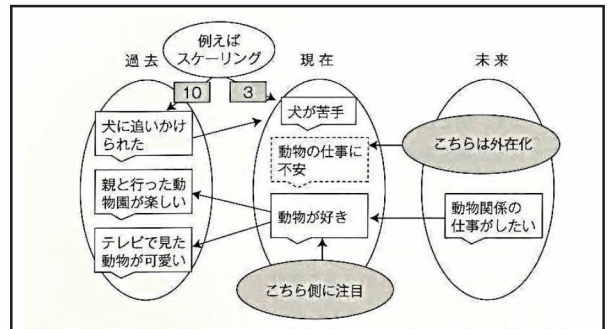
〔図3〕新たな物語の発見³⁾

Aは、担任という他者との会話から、自分を語ることや、自分の考えが正しいのか間違っていたのかに気付くことができる。また、写真や動画という客観的に自分を見ることで、自分を客観視し、正しい言動を意識するという力をもっており、この方法が有効で

あると考えた。

外在化について渡部は、「何らかのきっかけで、語られない物語(「自分はダメだ」という物語には出てこない自分)が大きな物語になっていく」ことや、「外在化することで、問題を文脈として捉え、それに対処していくことで、解決に近づけていくことができる。」と述べている。

また、渡部は自分を過去、現在、未来の3つに分け、それぞれの出来事や思いをたどって、自分の意思を固めることで、望む未来に向けて頑張る意欲が生まれるとし、以下の〔図4〕のような例を示している。



〔図4〕「望む未来」に向けて整理³⁾

そこで、Aにおいても、問題点を外在化するために、どうして問題となったのかを教師と一緒に考えていくことや、過去にどんな失敗をして問題となってしまったのかということを外在化し、問題を解決していくことで、焦点化した良さがより多く出てくるのではないかと考えた。このように「ナラティブ」の手法を取り入れ、Aの考えを聞き取ったり、対話をしたりすることにした。

② 物語論的アプローチ

福江(2017)は、『物語論的アプローチ』とは、子ども理解の方法論を包括しつつ、より大きな可能性をもつアプローチとして、近年注目されつつある実践の方法論である。⁴⁾と述べている。

ここでいう「物語論」という言葉は、本人の語りと対話から出てきた、経験や感情などを物語にしていることである。「物語」を作る実践は、本人しか知ることができない教科の苦手さや、好き嫌いを把握する例や、不安や心配などの心の中をさらけ出し、解決の方法を自らで見つけていくという例がある。福江は、実践の中で児童の「大工になりたい」という発言から、大工になるためのプロセスや課題を含めた自作の物語を児童同士の対話から作り、具体的な活動を共有し、一人一人が主体的に活動する中で、苦手としていた友達との関係性を、友達の必要性を感じることでより良くすることをねらっていた。

Aにとっても、自分の語りにより物語を作ることには有効であると考えた。また、より多くの語りが増えるように、本人が語りたくなるよう学びの体験を増やしていくことも必要となる。そこで、Aが楽しく語る経験を積むための学習場面を設定していくことが有効であると考えた。

Aの実態から考えると、Aは友達と空想の世界を作り、その世界のルールや物語を作り楽しむことができる。このことから、Aが物語を作ることに抵抗はないと考えた。そこで、友達との対話やAの語りを意識的に取り入れた問いの生成を見出し、物語論的な授業へのアプローチを行うことで、Aの「物語論的アプローチ」を完成させ、他者からも認められる喜びを感じることができるのではないかと考えた。

③ 文章完成法

文章完成法とは、文章の前半の「刺激文」を見て、被験者にそこから意味の通る文章を完成させる方法を用いた投影法の一つである。反応文を文章で書くということは、本人の性格や環境によって影響を受ける。このことから、本人の試行やこだわり、家庭環境、社会的な環境などの要因が見え、自己意識が見やすくするための心理試験のことをいう。

山本(2016)は、年齢に問わず障害がある方との面談と合わせて、心理試験である「文章完成法」⁵⁾を用いることで、言葉では語られない、対象者の言葉を聞き取ることに成功していることから、この方法は有効であると言える。

Aは、書くことについて困難さが見られるが、語り始めるきっかけがないと語りが弱くなる。そこで、文章完成法の刺激分の中から、Aに語ってほしい内容を精選し、その反応文をもとにAとの対話を通してAの語りを広げていくことができると考えた。

(2) 手立て

前述の先行研究を受け、渡部の主張している、「クライアントの問題を外在化して対応を考えたり、クライアントの気付いていない良さに焦点を当てて、それに気付くようにしたりする」ことで、問題を解消していく「ナラティブ」の手法に加えて、前述の福江の先行研究の実践を参考に、Aの前向きな思いを育むために、以下の手立てを考えた。

[具体的な手立て]

- ① 授業に前向きに取り組むための「自分の思いの数値化」【自立活動】
- ② Aの語りを引き出すための「文章完成法」【自立活動】
- ③ 友達との対話から生み出す「理想の学校づくり」【総合的な学習の時間】
- ④ 将来を前向きに考えるための「未来予想図づくり」【総合的な学習の時間】

① 「自分の思いの数値化」【自立活動】

- 日々の授業の振り返り、ビジュアルアナログスケールを用いて数値化する。
- 数値化した授業の感想をAが語りで表現する。

Aの日々の授業の感想から、語りを引き出したいと考えたが、質問に答えるだけでは、上手く表現できないことがあった。

そこで、医療現場で痛みの認識や痛みの推移が客観的に目視できるようにするために行われる、「ビジュ

アルアナログスケール」という方法を転用し、[資料2]のようなシートを用いて、一日の授業を振り返る形で、Aの感じたことや興味をひろっていく。その結果から、その時のA自身が感じたことを語らせるようにする。

Aが語る中で、ネガティブに感じたことではなく、ポジティブなことがらに注目し焦点化していくことで、授業に対する思いをポジティブなものに変えられるようにする。また、授業の改善を行うことによって、語ることで自分の思いや考えが反映されていくという経験を積むことができるようにする。そうすることで、Aに語ると良いことがあるという思いだけでなく、学習や学校に対する思いがポジティブな方向に変わり、学校を象徴する担任との信頼関係を築いていけるようにする。

月 日 () 天気 ()	
今日の予定	
時間	内容(場所)
朝	
1	
	数字 どうして?
2	
	数字
3	
	数字

【資料2】ビジュアルアナログスケールを転用した振り返りシート

② 「文章完成法」【自立活動】

- 定期的に文章完成法の「自分についてシート」に取り組む。
- 「自分についてシート」の結果を教師に語る。

Aは、自分を語る際にも、「分からない」「そんな気がする」という返事が多い。そこで、文章完成法の設問の中から、自分に関する事、家族、将来についてものを厳選し、[資料3]のように取り組む。

本来の文章完成法では、それらの回答から対象者の心理を分析するが、この実践では、回答したことを教師がより具体的に聞き、Aのポジティブな語りを焦点化し、ネガティブな語りを外在化して語りを広げていく。その結果、Aが「分からない」ということを言わずに、自分の回答を見て、自分自身を振り返ることができるのではないかと考えた。

① 子ども(小4まで)のころ、私は
② 私はよく人から
③ 私の失敗(しっばい)
④ 家の人は私を

【資料3】 「文章完成法」

③ 「理想の学校づくり」【総合的な学習の時間】

- 活動を通して、友達と語りを高め合う。
- 友達の語りを聞く場面をつくる。
- 友達と自分の考えを討論する。

実践③に関する、総合の単元計画は〔資料4〕の通りである。

Aは、学校の友達について、良いイメージをもっておらず、友達に関する質問をすると通常学級の友達のことを言うことが多い。これは、休校中に家の近所の友達と遊ぶことで、通常

テーマ 時数	主な活動内容	集団	指導上の留意点
小学校について考える(2時間) - 小学校のことを知る。 (ディスカッション) - 自分で小学校を考える。 (ワークシート)	クラス 個人	・子ども通してディスカッションしやすように、項目の設定や内容など教師発意ではなく、意見から設定する。	
理想の学校づくり(2時間) - 自分の考えの良さを考える。 (ワークシート) - 一つの意見をまとめられるように語り合う。 (パネルディスカッション)	個人 クラス	・自分の考えは、どのようにして生まれたかを考えるようにする。 ・友達と語り合う中で、どのように伝えれば良いか、友達の語りを参考により良い形に気付くことができるようにする。	

〔資料4〕総合的な学習の時間単元計画

学級の児童との遊びが楽しいという思いからくると考えられた。そこで、在籍する特別支援学級の友達と楽しい思い出を共有することで、学級という限られた中でも楽しく過ごすことができると気付くことができるようにする。

そして、近所の友達とは共有することができない活動として、「理想の学校づくり」を授業として行うことにした。これは、日ごろ大人と会話することを好むAが、教師と話をしているうちに、教師という仕事について興味を持ち、いろいろな質問をしていくことが多くあったことで、学校を作るという活動には興味をもって取り組むことができるのではないかと考えた。

「みんなで学校を作ろう」と発案し、学級の友達と意見を出し合ったり、一つの学校を作るために、友達と対話をしたりすることにした。これは、福江の研究結果にもあるように、友達の必要性を理解し、友達との関係を見直すきっかけになると考えた。

④ 「未来予想図づくり」【総合的な学習の時間】

- 興味のある仕事を発表する。
- 興味のある仕事を調べる。
- 今の自分と比べて、足りないことを考える。
- 未来設計図として、興味のある仕事に就くための道を考え、みんなの前で語る。

実践④に関する、総合の単元計画は〔資料5〕の通りである。

自分のなりたい職業に就くには、どうすればいいかイメージできるよう、興味のある職業について調べることで、自分の目標をもつことができるようにした。

また、Aに興味を持っている仕事について質問すると、「○○になりたかったけど、あきらめた。」や「無理だなと思った。」などマイナスなイメージしかないため、自分が頑張れば、色々な仕事を見つけられるということを知ることができるように、関連する仕事についても調べることにした。

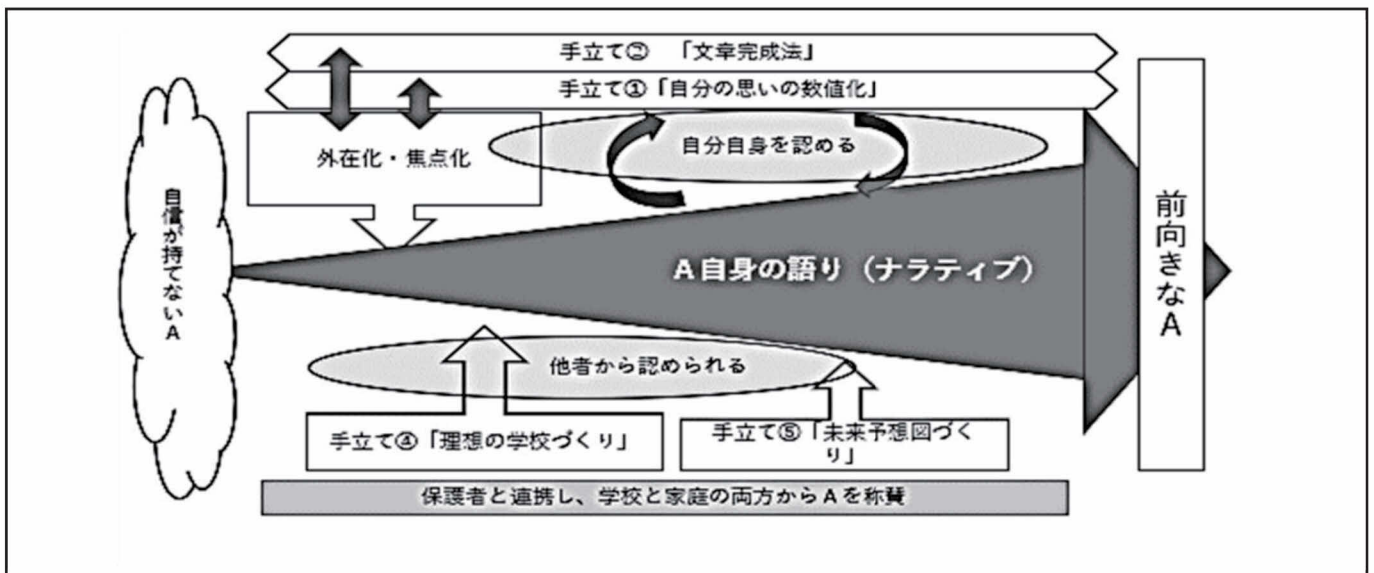
この手立てを用いることで、自分で調べることや、友達に分かるように語り、友達の発表を聞き、疑問に感じたこと、より良くするための方法を考えて意見を述べていくことなどの考えを述べることは、Aの語りを広げることにつながり、将来就労したときに役に立つ語りや対話のスキルが身に付くのではないかと考えた。

(3) 研究構想

Aに自分自身を認めることにつなげるために、Aの語りから自分自身に関することを表出す手立てとして、「文章完成法」や「自分の思いの数値化」を取り入れようと考えた。また、他者から認められること

テーマ 時数	主な活動内容	集団	指導上の留意点
興味のある仕事を調べる(2時間) - 興味のある仕事を考える。 (発表) - 自分が興味のある仕事について、調べる。 (インターネット・書籍)	クラス 個人	・なりたい仕事だけでなく、多くの仕事があることに気付かせる。 ・仕事について、知らないことがあることに気付かせ、調べようという意欲を高める。	
未来予想図づくり(2時間) - 今の自分と、なりたい仕事に必要なことを比べて、隙間ごとに何をしたらいいか考える。 (ワークシート) - 友達の発表を聞き、質問や意見を言うことで、友達の考えに深みが増すようにする。 (パネルディスカッション)	個人 クラス	・自分に足りないことを知ること、努力しようとする思いや、何をしたらいいか考える力が身に付くようにする。 ・友達の発表を聞くことで、より自分の考えが他者から受け入れられるものになるように意識させる。	

〔資料5〕総合的な学習の時間単元計画



〔図5〕研究構想図

につなげるために、「理想の学校づくり」や「未来予想図づくり」など、友達と語り合い認め合える手立てを考えた。また、Aの特性から、友達や保護者から称賛される喜びを感じられるようにすることで、より前向きになると考え、保護者と連絡帳や懇談を通して情報共有し、保護者からも褒めてもらえる環境を整えることにした。これらをまとめたものが、研究構想図〔図5〕である。

(4) 検証方法

①～④の各手立てにおいて、下記の表のように「ア量的検証」「イ質的検証」を適切に用いて行っていく。

手立て	検証方法	検証内容
①「自分の思いの数値化」 【自立】	ア量的検証	Aが毎日、振り返りシートにその日の出来事や授業について、記載した5段階の数値を点数化し、数値を時期ごとに比較することで、Aが授業についてどのように感じたかを検証する。
	イ質的検証	Aが授業について語った感想がどのように変化しているかを、テキストマイニングを活用して検証する。
②「文章完成法」 【自立】	イ質的検証	シートの反応文を基に、Aの語りにもどのような変化が見られたのか記録を検証する。
③「理想の学校づくり」 【総合】	イ質的検証	授業記録から、参与観察法を用いてAの発言を記録し検証する。その際にAの発言の前後の発問や友達の言動を参考に、どのような考えをもったのか、ということも推察し検証する。
④「未来予想図づくり」 【総合】	イ質的検証	前述と同様に、授業記録から、参与観察法を用いてAの発言を記録し検証する。その際にAの発言の前後の発問や友達の言動を参考に、どのような考えをもったのかということも推察し検証する。

3 授業実践と検証

(1)「自分の思いの数値化」【自立活動】の実践 (手立て①)

ビジュアルアナログスケールの手法を取り入れ、Aにその時の自分が、出来事や授業に対してどう感じていたかを客観視することをねらい実践を行った。

① 実践の内容と考察

本学級では、毎朝今日の予定として、連絡プリントを作成している。その中には、教科と内容、授業を受ける教室、給食の献立、そして明日の授業予定を記入している。そこに、Aが感じたことを振り返るため、「とても楽しかった」を「5」、「つまらない」を「1」

として、5段階で思いを数値化することを、宿題として取り組ませた。翌日、その数値を基に、楽しいと感じた理由や、つまらなかった理由など語りにつながるように「どうしてそう思ったのか」と聞き取りをする実践を行った。

実践当初のAは、数値を見ながら「この授業はどこが楽しかった？」と問いかけると「ファイルづくり」や「学級目標が決まったから」など、授業の内容で短く答えることや、1や2という「つまらない」という評価の振り返りは、「忘れた」や「なんとなく」と答えることが多かった。また、3の「少し楽しい」と答えた時には、「普通」と答えるなど、Aの感想が具体的に出てきているとは言い難い内容になった。

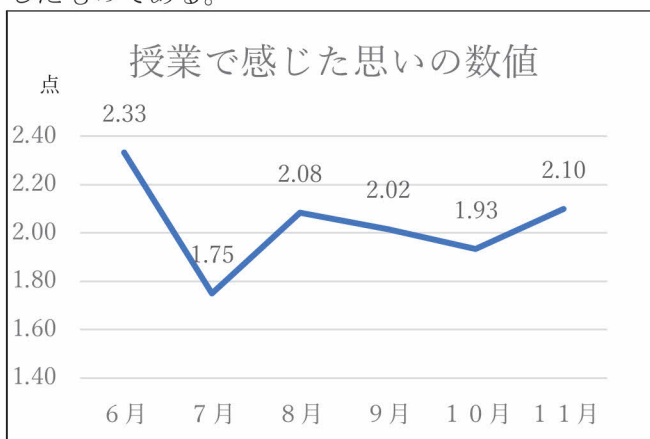
しかし、回数を重ねていくうちに、「裁縫が上手くできたからうれしかった。」や「たくさん話ができ楽しかった。」など、Aの感情が出てくるようになった。そこで、さらにAが語りをしやすくするために、振り返りシートに数値だけでなく、一行の感想を書くようにした。

すると、「普通」という答えが出てくるものが多いものの、中には「失敗しないか緊張した。」や「間違えて残念だった」、「久しぶりで嬉しかった。」など、その授業に対する率直な思いが述べられることが多くなった。

② 実践の検証

ア 量的検証

ビジュアルアナログスケールを活用し、Aの振り返りシートに書かれた授業に対する感想の数値をグラフにまとめたものが〔図6〕である。この数値は、一教科最大5点に対しての、Aの一時平均値を表したものである。



〔図6〕振り返りシートの数値

グラフからは、どの月も満点の半分以下の2点前後であることが読み取れる。これは、Aが授業に対して「楽しい」と感じていないことが推測される。

実践を始めた6月の数値は、「4」や「5」という高い数値を出していた「学活」「理科(園芸)」が多くの日に入っていた。このことから、Aは友達と一緒に何かを考えたり、作ったりすることに楽しさを感じると判断できる。反対に、7月は、「学活」や「理科

（園芸）」は少なくなったことで、平均点が下がったと考えられる。

8月以降は、大きく数値に差が生まれていないことから、授業を楽しんでいると感じていないながらも、どの教科にも同じように取り組んでいると判断できる。

数値化をきっかけに、教師がAのつけた点数について、「どうして、この点をつけたか。」と尋ねると、Aは「どうしてだったかな。」と考えたり、理由を答えたりして、自分がなぜそう感じたのかを、客観的に考えるきっかけにはなったと考えられる。

イ 質的検証

Aの一行の感想を、客観的に検証するため、テキストマイニングをかけて、月ごとの出現回数と要約から検証した。

《6月》

名詞	スコア	出現頻度
大変	0.06	3
びっくり	1.53	2
エプロン	1.11	2
星	0.09	2
動詞	スコア	出現頻度
作る	0.01	2
考える	0.01	2
できる	0.01	2
止める	0.02	1
間違える	0.01	1
覚える	0.01	1
形容詞	スコア	出現頻度
楽しい	0.06	5
うれしい	0.19	3
難しい	0.03	2

《感想の要約》

- ・草抜きが楽しかった
- ・工作みたいで楽しかった
- ・たま結びがむずかしかった

《7月》

名詞	スコア	出現頻度
ゴーヤ	0.77	1
裁縫	0.41	1
じゃんけん	0.37	1
詩	0.29	1
動詞	スコア	出現頻度
できる	0.01	3
書ける	0.07	1
なくなる	0.01	1
負ける	0.01	1
もらえる	0.01	1
形容詞	スコア	出現頻度
うれしい	0.19	3
よい	0.02	3
上手い	0.01	1
大きい	0.01	1
怖い	0.01	1
楽しい	0.00	1

《感想の要約》

- ・裁縫が上手くできました
- ・不思議な気分になった
- ・ゴーヤがもらえてうれしかった

《9月》

名詞	スコア	出現頻度
緊張	0.26	3
残念	0.13	3
びっくり	0.05	2
心配	0.04	2
形容詞	スコア	出現頻度
難しい	0.07	3
楽しい	0.02	3
おもしろい	0.03	1
うれしい	0.02	1

《感想の要約》

- ・予定を覚えたい
- ・習字を頑張りたい
- ・逆転勝ちが楽しかった

《10月》

名詞	スコア	出現頻度
びっくり	0.05	2
久しぶり	0.03	2
大変	0.03	2
動詞	スコア	出現頻度
疲れる	0.03	2
分かる	0.02	2
つかれる	0.09	1
形容詞	スコア	出現頻度
難しい	0.03	2
嬉しい	0.01	2
楽しい	0.01	2
おもしろい	0.03	1
恥ずかしい	0.02	1

《感想の要約》

- ・おもしろかった
- ・恥ずかしかった
- ・なかなかできない

《11月》

名詞	スコア	出現頻度
大変	0.06	3
腰	0.11	2
残念	0.06	2
本	0.05	2
びっくり	0.05	2
動詞	スコア	出現頻度
できる	0.01	3
思う	0.01	3
つかれる	0.36	2
読める	0.13	2
進む	0.08	2
形容詞	スコア	出現頻度
楽しい	0.04	4
難しい	0.07	3
痛い	0.04	3
よい	0.02	3

《感想の要約》

- ・あせった
- ・うれしかった
- ・おもしろかった

6月や7月は、実際に目に見えるものに対して、感想を述べるが多かった。このことから、Aにとっ

て目に見える成果が多かったことで、前向きになることができたと考えられる。

9月には、体育発表会に向けた練習が本格化し、学年の予定が増えていったことで、自らも予定を覚えたいという前向きな気持ちが生まれたと考えられる。また、活動に対して「頑張りたい」という気持ちや、活動のゲームに対して、「逆転勝ちしたい」という前向きの発言が見られた。これは、様々な教科に対して「楽しさ」を感じることができるようになってきたと推測される。

10月は、修学旅行や6年生の校外学習、その合間を図工の作品作りと、交流学級に行くことだけでなく、学級でも、考えることや決めることも多くなった。そのため、「なかなかできない」という感想になったと推測される。しかし、「おもしろい」という感想もあり、難しさを感じながらも前に進もうとしていることが推測される。

11月は、「うれしかった」や「おもしろかった」が多くなり、今までのAとは違い、多くの活動に楽しさを見つけることができたと考えられる。

このことから、毎日を振り返ることで、一つ一つの授業をしっかり受けたり、内容を忘れてしまわないようにするという意識が芽生えたとともに、頑張ると達成感が得られるということに気付くことができたと考えられる。

(2)「文章完成法」【自立活動】の実践(手立て②)

心理学で使われる「文章完成法」のシートを基に、A自身のこと、家族の事、友達のこと、将来のことに関する出題をまとめ、「自分についてシート」を作成し取り組んだ。

① 実践の内容と考察

Aは、「自分についてシート」に対して抵抗があったため、最初は、書けることだけを書くことにした。これは、Aの気持ちや考えを知る前に、シートへの悪いイメージをもつことを避けるためであった。そのため、最初の頃は白紙が多くなったが、Aが記述してきた内容について、「焦点化」や「外在化」を行った。

例えば、Aが「子どものころ、私は」という刺激文に対して、「ワガママ」という反応文を記載してきたときに、「ワガママとは、どういうこと?」「それは、ワガママなの?」というように質問をしていく。その際には、Aの行動について話をするのではなく、「ワガママ」とはどういうことかを語らせていく。そして、Aなりの答えが見つかったところで、対策を考えていくようにした。

② 実践の検証【質的検証】

実践の結果の抜粋を、以下の表にまとめる。

刺激文		
実践開始時	実践前期	実践後期
①子どものころ、私は		
ワガママ	色々だめだった	普通
④家の人私は私を		
うるさい	うるさい	不注意残念

⑦勉強		
白紙	算数と国語を頑張っている	
⑩調子の良いときは		
白紙	お腹と体と頭が回転している。	色々できる。

このような記載から、Aは自分に関することは前向きに考えられるようになったと推測される。このことは、①の刺激文に対する反応文で「ワガママ」と言ったAに対して、「ワガママ」を外在化し、Aがわがままだと思っていたことは、本当にそうなのかという点に絞ってAと語り合う中で、徐々に「ダメだった」というようにわがままではなく、家族や友達に対してダメなことがあったと考え始め、最終的には、幼い頃、誰しもが経験することであったと認識し、「普通」という反応文に変化していったと判断できることから分かる。

(3)「理想の学校づくり」【総合】の実践(手立て③)

① 実践の内容と考察

Aを含めた学級の児童が、活発に自分の意見を語ることができるように、教師からは「理想の小学校を作ってみよう。」という投げかけのみを行い、学校に作るにあたり、何を決めたらいいのかを児童が考えるようにした。最初は、何を決めたらいいのか迷い、意見がほとんど出てこない時間が流れた。しかし、Aが「先生とかかな。」と独り言を言い始めると、周りもそれに反応して、「授業」や「教室」、「学校のある場所」など意見が出るようになった。

このようにして、出てきた項目を基にワークシートを作り、それぞれの考える学校の意見を書き出させた。そして、自分の考えを語ったり、相手の語りを聞いたりすることで、自分の考えを振り返る活動を取り入れ、相手を意識した語りができるようになるのではないかと考えた。

以下、実践における2つのエピソードを示す。

ア エピソード①

「理想の学校」の先生と時間割を決める場面。

(背景)

自分の意見を語り合い、一つの意見にしていく授業の第1時である。ここでは、語りを生みやすくするために、ホワイトボードを用いて、自分の考えを書くことを取り入れた。本実践は、Aを含めた4人で活動を行っている。Bは小学6年生男児で、自閉症・情緒障害児学級に在籍しており、知的の発達に遅れはないが、コミュニケーションが苦手、選択制緘黙がみられる。Cは、小学6年生男児、Dは、5年児で知的障害がある児童である。

4人の関係性については、AはBのことは好きで、仲のいい友達だと思っている。CとDは仲が良く二人で協力して教師の手伝いや友達の手伝いをしてくれる。AはDとは会話をしたり、一緒に活動をしたりするが、Cとは少し距離を置いている。AにとってのCは、4年生より通常学級から編入してきたことで、接し方が分かっていないのではないかと推測される。

(エピソード)

最初の「どんな先生がいい?」という問いかけに対し

て、「ドラえもん先生」と「やさしく厳しい先生（Aが考えた先生）」で、A・Cは「優しく厳しい先生」。B・Dの「ドラえもん先生」に分かれ、語り合うことになった。

教師からは、「自分の考えの良さ」を伝えること、「相手の考えの悪いところは述べない。」ことだけでなく、語り合うポイントとして、「相手を説得するつもりで話す。」ことを伝えた。より具体的になるように、AにはDを説得するように考えることを伝えた。

Aは、ホワイトボードに小さい文字で自分の思いを書き続けていた。それを見ていたDが、教師に「(Aの意見は) 呪いにしか見えない。」とつぶやいた。教師が、「長く書いたほうが良いとは限らないよ。」と伝えると、「(Dを) 説得できるように頑張る。」と答えた。

Aは、「優しくすれば困ったら助けてくれる。厳しい先生は、苦手なことを教えてくれる。いけないことを注意して教えてくれる良い先生が、僕は良いと思います。」と語った。Aの語りを聞いた友達が「優しく厳しい先生」がよいと考え方が変わったことを経験する。

次は「何時間授業にするのか」というテーマでは、「1時間授業と給食」と「5時間授業」で二つに意見が分かれた。Aは、「小学校と同じ、5・6時間授業」という意見を出していたが、周りの意見を見て、「5時間授業」にしたと後に語っていた。語りをより具体的にできるように、教師から「発案した人の考え」にも注目するようにアドバイスをし、互いに意見を語り合うようにした。

Aは、「5時間だとちゃんと勉強ができる。」こと、「5時間でも給食を食べることができるし、友達と遊ぶことができる。」と語った。

しかし、今回はCとDの意見を変えることが出来なかった。そこで、自分とは異なる考えについて、「マイナスな点」に注目し語り合いを行うことにした。

Aからは「ちゃんと勉強しないと将来に関係するかもしれないし、頭が良くなると頭の回転が良くなる。」と語っただけでなく、Bの意見を受け「Bも言っていましたが、運動しないと体がなまってしまう。」とも語っていた。

それでも、意見は分かれたままであったため、「友達の意見を聞いて、どんな言葉を投げかければ、どう考え方を変わってもらうのかを考える。」ことを課題として語りを考えるようにした。

Aは「将来の役に立つし、なりたい仕事に就けるかもしれない。親孝行ができるかもしれない。」と語った。Cは「説得されちゃいました。」と言ってAの意見に共感を示し、「5時間授業」が選ばれた。

イ エピソード②

「理想の学校」の教科と新しい教科を決める場面
(背景)

自分の意見を語り合い、一つの意見にしていく授業の第2時である。Aは、第1時を終えて、「難しい」という感想を残していた。その難しいという感想は、みんなの意見の一つにするということであった。この日は、Dが体調不良で休みだった。

(エピソード)

今回は、理想の学校の教科を決めることになり、みんなの意見を確認していくと、Aは、「学校と同じ(9教科)」という意見であった。意見は、「学校と同じ」を選んだA、Bと「図工以外で学校と同じ」を選んだCの2つで分かれたため、語り合いをすることになった。

Aは、「苦手な教科、好きな教科があると思いますが、やることで経験を積むことができ、将来につながる。これからのことに役に立つ」と語っていた。そして、同じ意見のBが、「図工があった方が色々作れて楽しい。」と

語ったことに対して、違う意見のCが「片付けがあって、休み時間が無くなる。だから、図工はいらない。」という語りを聞き、Aは独り言として、「頑張った方が楽しいよね。」とBに向かって言った。

結果として、今回もCが意見を変えて、AとBの「学校と同じ」が選ばれることになった。

次に、「新しい教科を考えよう」という題で語り合いを行った。3人がそれぞれの考えについて語る方法をとって行った。Aは、「プログラミング」という新しい教科が良いという考えについて、「図工などでは作れないものが作れたり、ロボットを作ったりできるし、プログラミングで外国とつながりモーターができるし、将来、IT企業なんかで、人を助けたりできるし、収入が高い。」と語っていた。

② 実践の検証

本実践の検証については、参与観察法を採用し、授業中におけるAの発言が前向きになっているかどうかを検証していく。

エピソード①では、最初の語り合いは教師が『自分の考えの良さ』を伝えること、『相手の考えの悪いところは述べない。』こととしたルールを忠実に守り発言していた。しかし、友達の語りを聞いたり、友達が自分の語りを聞いて、意見を変えるという経験をしたりしたことで、さらに友達の意見を変えさせるために、どんなことを伝えればいいのかを考えたと推測される。その結果、友達の意見を語りの中に入れることや、「将来」という考えにつながったと判断できる。

エピソード②では、最初の語り合いでは、「図工があった方が色々作れて楽しい。」と語っている。Aは、絵を描いたり、工作で何か作ったりすることが好きであることから、自分の気持ちを話したと考えられる。その一方で、Cが語った「片付け」「休み時間」ということは、Aにとっても魅力的であった。

しかし、その発言に対して、「頑張った方が楽しいよね。」と述べている。この発言以降、教室でも、図工に限らず準備や活動後の片付けを自ら行うAの姿が見られるようになったことから、自分の語りから、行動が変わったきっかけになったと判断できる。

エピソード①②を通して、自分の語りによって友達の考えを変えることと、自分の行動が変えられることに気付いた半面、友達の意見に対して同調する体験をするまでには至らなかった。

実践の結果、AはBとの仲を深めることができたものの、反対意見になることが多かったCとの関係は、良くも悪くもならなかった。

そこで、友達の意見に同調する体験を通して、Aの語りや考え方の幅が広がり、友達を認めることができるのではないかと考えた。

(4)「未来予想図づくり」【総合】の実践(手立て④)

① 実践の内容と考察

「未来予想図づくり」では、語り合いをするのではなく、自分の興味のある職業を調べ、みんなの前で発表する。発表を聞いた側は、その発表について質問をする形式で行った。

この活動は、将来に向けたキャリア教育の一環として行っただけでなく、友達の意見に同調したり共感したりする経験を積むことをねらいとして取り組んだ。以下に、実践におけるエピソードを二つ示す。

ア エピソード③

第1時として、仕事を調べる上で、自分が知っているようで、知らなかったことがあると気付かせるために、仕事について教師からプレゼンテーションを行い、職業調べへの意識を高めることを目指した。

(背景)

AとBに対して(C、Dは欠席)プレゼンテーションを行い、それぞれの興味のある仕事について語る活動を行った。Aは、未来を考えることに対して、「無理」や「分からない」という後ろ向きな発言が多いため、なりたい仕事ではなく、興味がある仕事を語るようにした。

(エピソード)

Aがこれまで興味を示さなかった、アパレル企業について教師がプレゼンテーションを行った。Aが、興味がないと思っている仕事でも、興味を示す内容の仕事(例えば、パソコンを使った仕事)があるということに気づき、Aの興味を広げられるのではないかと考えたためである。Aは、プレゼンテーションが始まると、聞いてはいるものの、特に興味がない様子で、静かにしていた。

教師が、パソコンの仕事や指示出しの仕事について「知ってた?」と聞くと、「あるだろうとは思ったけど、、、。」というように濁した答えをしていた。

プレゼンテーションの後、自分の興味のある仕事を書き出す活動を行った。最初は迷っていたAであったが、Bがたくさん書き出す様子を見たり、友達が「会社」という発言を聞いたりして、「会社もいいかもしれん。」「物づくりとか。」と発言し、たくさんの仕事を書いていった。

その中でも、「先生、パティシエってどう書くの?」「パティシエって難しいかな。」と独り言のようにつぶやいていた。しばらくして、Bのホワイトボードが目に入ったAは、「漁師ってどう書くの?」と言いつつ出した。Bは、漢字が分からずひらがなで書いていた。教師が漢字を教えると、「漁師は疲れるって。」と発言した。教師が「どんな仕事も疲れます。」と切り返すと、「人生はそんなに楽じゃないもん。」と答えた。また、自分が書いた職業の中の一つを指さし、「これ、家から遠いもん。」など前向きとはとれない発言を繰り返していた。

その後、自分が書いたものを発表してもらおうと、パティシエ以外の内容は、Bと似通っているものが多くあった。その他にBと異なる職種として、医療関係やボランティアについても「人助けしたい。」と言って書き出していた。

その後、2つぐらいに絞って調べてみようかと提案すると、Aから、「動物園の裏側とは、パティシエは、家とかとは違うから、どういう工程で、どれくらい種類があるのか。(を調べる)」という発言があった。

教師が、「漁師とかの一日の生活について知りたくない?」と投げかけると、Aは「知りたい」と即答し、「どんな給料かも知りたい」という発言があった。

イ エピソード④

エピソード③の授業を終えて、気になる職業について調べる学習を始めた。Aは、「宇宙飛行士」について調べることにした。Bと教師のやり取りを聞いていたAは「宇宙飛行士」について調べることになった。二人には、同じ資料を使って調べてもらい、AとBの考え方の違いや、受け取り方の違い

に気付くことができることを目指した。

(背景)

それぞれが、自分の興味のある仕事について、調べたことを発表した。発表した後、聞いていた友達から質問を受けたり、こうすると良いなどのアドバイスを受けたりするようにし、自分の考えをさらに高める活動を取り入れた。

(エピソード)

授業が始まり、発表しようとするAは、「自分の一番気になる仕事はやめた。たたかれそうだから。リスクがある。」と発言した。

Dが「すき家のクリーンリネス」について調べたことを発表する中で、「中学校で整理整頓をしたい。」と語ると、Aは「勉強をしたほうが良いよ。」と発言した。

Aの発表では、「中学に入ったら、色々な勉強を頑張りたい。」と発言していた。発表が終わり質問タイムになると、「怖い」と言ってその場から逃げようとしていた。Cが、「どんな外国語を勉強したいですか?」と聞かれると、落ち着いて「(宇宙飛行士は)いろいろな国の人がいるので、色々な国の言葉を学習したい。」と答えていた。

また、教師から「どうして宇宙飛行士について調べたか。」と聞かれると、「知らないことがたくさんあるので、知りたいなと思ったことと、挑戦してみたいなと思ったからです。」「挑戦したいなと思ったのは、本とか読んでかつこいいなと思ったからです。」と答えていた。

Aは、同じ宇宙飛行士について調べたBに対して「お仕事サイトで、(宇宙飛行士になるには)自然科学の大学で勉強しないとイケないと思ったのですが、行かないですか?」と尋ねた。教師が「自分が気付かないことを、友達から教えてもらうことも大事です。」と話をすると、Aは「宇宙学校はないです。」と間違いを指摘していた。

最後のまとめとして、教師が「今の自分はこうだから、中学校ではこうなりたい。そして将来は気になる仕事に就きたいということを調べてもらいました。では、就きたい仕事になれなかったとき、それまでにした勉強とか活動は無駄になるのだろうか。」と投げかけると、Aは「無駄にはならない。他のことにも使える。」と答えた。

Aに対して「Aが頑張った勉強、外国語、体力は、自然科学系の大学に入れなかったとき無駄になる?」と聞くと「無駄になることもあるけど、使えることもあると思う。」と答え、Bに対して「外国語は無駄になるかな。」と教師が聞くと、AがBに向かって「通訳になれる。」と答えた。

最後の質問で「なりたい職業になれなかったらどうしますか。」とみんなに質問し、Aの結論として、「他の仕事に就く。無駄になるかもしれないし、無駄になれないかもしれない。」と発言していた。

② 実践の検証

本実践でも、参与観察法を採用し、授業中におけるAの発言を考察していく。

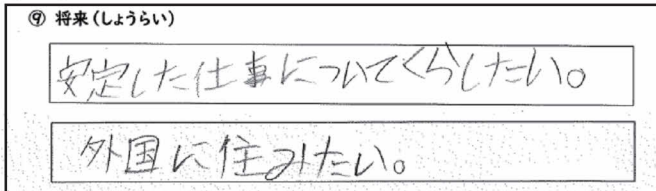
エピソード③では、仕事をしている人の中には、生活のためや、他の夢をかなえるために働いている人がいることを知り、「資格がないからできない」とあきらめるAの認識を改めることを目指したプレゼンテーションも、素直に受け入れることができず、興味のある仕事を書く手が止まるが多かった。しかし、エピソード①②を通して、共感できる友達となったBが書いている姿を見て、興味のある仕事を書いたり、書いたことから思考が高まり、自分の興味のある仕事を発表したりする姿が見られた。

Aの授業中の発言をまとめると、これまでのAの、

「無理」や「分からない」というマイナスのイメージが徐々に緩和され、質問や発言が増えていき、前向きに考えようとし始めていると推測される。

エピソード④では、自分で調べたことを発表するということが、恐怖心に近いプレッシャーを感じていることが推測される。今までのエピソードとは違い、自分一人で資料と向き合いまとめたため、自信がなかったものと推測される。しかし、自分の発表を聞いた友達の様子から、間違っていなかったという安心感が生まれたと考えられる。それは、発表後の発言が増えていく様子から推測される。

エピソード③④を通して、未来の自分を語らなくてはならない本実践を通して、自分の夢を語っても、誰からも批判や中傷されることがないということに気付くことができたことと推測される。このことは、手立て②の文章完成法の中の刺激文にある「将来」についての反応文が以下の〔資料6〕のように、仕事に就くことだけでなく、夢を記載していることから判断できる。



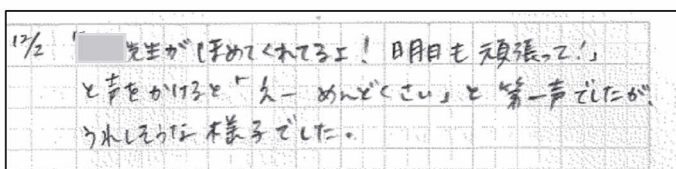
〔資料6〕 Aによる文章完成法の記述

Aにとって一人で何かを調べたり考えたりするよりも、友達や他者に語っていくことで安心感であったり、達成感を味わうことができると判断できる。また、語っていく中で、自分や友達にとって良い発言が飛び出し、自分の語りで前向きな自分が表出している様子が見られた。

4 おわりに

本実践は、Aが得意とする話すことから、ヒントを得て「ナラティブ(語り)」を中心として、Aを前向きな考え方をもちことができるようにと願い実践を行った。この実践について、Aの保護者の協力を得ることができ、日ごろの様子を連絡帳に記載したり、懇談会時に直接伝えたり、直接話した方が良いと判断したときには、電話連絡をしたりして伝えていた。

手立て①のビジュアルアナログスケールでは、Aの数値が低いことに心配している様子も見られたが、次第に前向きになっていくAの様子から、「家でも褒めました。」という記載が見られ、保護者もAのことを前向きに捉えられるようになったと考えられる。このことは、以下の〔資料7〕の連絡帳の記載から判断できる。



〔資料7〕 Aの保護者による連絡帳の記載

最後に、本研究の成果と課題を以下に示す。

《成果と課題》

- 自立活動や総合的な学習の時間において、Aの良さである「語り」をベースにした手立てを工夫したことで、Aの思いや考え方が表出されるようになった。
- Aの良さである話すことを、苦手な活動にも取り入れたことで、友達に認めてもらうことができ、前向きな姿が見られるようになった。
- 良さを取り入れる手法は、本学級の他児童に有効であった。このことから、自己評価が低くなりがちな通常学級在籍児童の取り出し指導等にも十分応用できると考えられる。
- 個のねらいに迫ることに加えて苦手な面を軽減するためにも、個の良さを多方面からより丁寧に捉えたいうえで活動を工夫していくことが必要である。
- 個の将来につながる力を育成するために、キャリア教育の視点をさらに重視し、より細やかなスモールステップ化を図ることが必要である。

【引用文献】

- 1) 黒澤礼子 「新版 発達障害に気づいて・育てる完全ガイド」 講談社、2018
- 2) 全国特別支援学校知的障害教育校長会 「特別支援教育のための キャリア教育の手引き」 ジーアス教育新社、2010
- 3) 渡部昌平 「はじめてのナラティブ/社会構成主義キャリア・カウンセリング」 川島書店2016
- 4) 福江厚啓 「小学校知的障害特別支援学級における協働的な学びづくり～物語論的アプローチと環境構成の考え方をういた生活単元学習の試み～」 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要、2017
- 5) 山本智子 「発達障害のある人のナラティブを聞く―「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方―」 ミネルヴァ書房2016

【参考文献】

- ・ 李熙馥、田中真理 「自閉症スペクトラム障害児におけるナラティブの特性：フィクショナルナラティブの構成と行為の側面に焦点を当てて」 東北大学 発達心理学研究2013 第24巻
- ・ 尾川満宏 「学級活動・ホームルーム活動でのキャリア教育を構想する - 適応と抵抗を通じた社会参画、承認と参加を育む学級経営」 愛媛大学教育学部紀要 第64巻
- ・ 岸本直子ほか 「アスペルガー症候群の青年の自己意識 - 文章完成法を中心に -」 奈良教育大学青年心理学研究2012 第24
- ・ 藤井知弘、花館めぐみ 「話し合い活動におけるメタ認知の実相 - 中学生に対する実験的な学習を通して -」 岩手大学大学院教育学研究科研究年報2019 第3巻